

古方子集

下

特別
A5
6714
2



なるまゝにあらせむとて
 あらばとていふに
 海やう人あはれとて
 ともかくもいふに
 月乃影此もいふに
 孫是編書あはれとて
 獲乃葉序ふ一筆便取を
 乞ひ給ふとていふに



しんくの才辯ト一何
あやをよしといふはなれ
やむあきし入ゆひの
奥古のふを

既あきし入ゆひの

都後赤良堂

枕の便

表八句

箱書やま帝の天窓と一動又
算盤知れ袖了り為力
新と呼ぶ上方酒を待兼く
平ふ物を足はり稽す
そのと心れ梅はちまも度紋事
凡行焼をと切り石糸
手拭乃こまぼるしふ地と知
結句落才うあてふく

岫峰堂

秀玉

秀圃

百里

標梅

素丸

知之

湖十

貫十

二星

今宵いと星を恥はま祿
無乃踏へ小神紙借と初手水
柝と宵人を救張と天の川
箱入を多登娘かむじうい
るとと青金異射く天の川
七宵おむくく手向せつ子瓜
七宵い乃きましくお夢の星は
糸小いや芳野の雲々星運
星と青帯隠しや山つり

杏英 山玉 沾田 蒼玉 秀玉 沾玉 真列 凉巴 ^{北哉}暮琴

七夕

江の橋は相恋と可し星運
はくく瓜角豆自也知れ家
おや徳ぬ装り寄来れ星の足
菊ふり花一代女やこれ新
るの月れ糸登をなま乃と天の川
この星板家おは蜜の酒を
侍りゆれきりの任満く由路の時あん
蘇吟おむじうい
照る月れ水なまを流あり天の河
短冊お織の柱とひや天の川

沾洲 周竹 山夕 一漁 青嶽 菜室 志水 吟糸

七夕の旦夢を親する處の世を
外くも小娘ふあしほく運
送る身不似くも天の川
是不借のいさをも川に寄陸寄
向ふ人後のか多場はの宿
よそかあし内見も此二川星
年よの星は香炉也 机
節發れ夢を淋踏る天に川
竹の葉紙敷きやちくちく女を
七夕小焼をさかどれ 玄冥夢

如立 柴荷 藤枝 昔花 浴水 如珪 梅枝 霞友 竹立 秀夕

少し腐ふあつや二星は浩渺死
節の端やこたれくち夜寒
らるるうし種ひの糸や箱根姫

双竹 楓枝 立几

女

身金夢を運ふいあふは星夜程
星合れ竹の葉事れ標遠の
鬼灯や竹方一葉の二川がし
ちし毎れを運梅も石や女はし
小母もね推もや現るの手向家
数入も年中はなふ夜地天に河

白雲 百里 標梅 莎鶴 延萬 如見

七夕の世用不立しあつての張
かたきしむる人ももも銀河
深物れゆるやあつてあつての
由境たうの中はあつてあつて
おつてや山鳥空に飛れあつて
町家中へあつてあつてあつて

殊暑

市厨子柳のうらみの香は殊暑
飯飯のまよとあつてあつてあつて
鹿を乃まこれ行方殊暑部

葉亭

何虹
風車

標立
露月

富雲
和賤
澤石

梅の香は独梅をや下殊暑哉
度忘れしはあつてあつてあつて
紫錦乃夕日とあつてあつてあつて

稲書

稲書や仁まこれいあつてあつて
稲書や皆周礼乃あつてあつて
稲書はあつてあつてあつてあつて
雲深綾織や稲書あつてあつて
稲書や二あつてあつてあつてあつて
稲書や水浪とあつてあつてあつて

東水

露月
八木

魚列
出口

東水
花遊
浪十
和賤



関寺

表八句

今も露の可き道に関寺鐘
 未だ曇乃曉 霧より風
 八句の露を初歩を力ある
 家者の移入 熱くも安原
 馬屋の呼吸 霧を口かき
 教と文下り 前藤乃道
 雨より風 霧を口かき
 懐の奥へ 霧を口かき

五尋

山水 都竹 書聖 王尋 都竹 山水
 山水 都竹 王尋 都竹 山水

浄教書と用く胸より西丸刺
 ありしよ丸梅を達平の花服皮
 鎌倉へ山のぼりありは初難
 子ら星丸中ふ耳まきうしくは
 長刀で抜切りしう勢六の死
 よと娘ゆくとある女徳子の時
 瘦馬の路よ越路乃部么
 雲の松安堵お帰る並費よ非
 羽撃の尾羽とやうしう鏑哉
 故遠の夢やねらふは合也者

玉尋 里仙 岷東意 惠風 至兄 琴屯 琴子 水衣 艶女 露月





清き髪は清き朝や掃くつみ
 甘き町や河原小茨馬より赤子
 ちる花の形見は赤子と戯れ
 帯あけぬけ袴衣や花のよこ
 掃くおる雀井里のなまは
 月おも梅うさぐさへむく雀
 高きき夜の出踏ふ梅を丸
 まるは江の月知洗へし松の香
 階子と赤おくや花は妓まき人
 雲お梅し起るは赤子の赤おく

玉尋 露石 雄玉 如珪 子蝶 折中 完車 紅夕 秀圃 素丸

批焉小者以動とありて
 念まろく、流し、粘の流る音
 比之粗後の裾に、綾ゆいて
 現く、あま、大僧正乃、管れ花
 見、籥や夕風あつ、兒、隅梅
 陰弓、屋小、杉小、坊、高、番、露
 輕業や、念怒乃、腕、見、下、ら
 い、下、ら、は、花、小、并、笛、馬、小、鞍
 舞、下、ら、花、や、鞍、馬、の、た、く、鳥
 岸、多、し、花、見、我、お、き、曼、た、塔、記、色
 板、の、本、を、新、酒、お、き、あ、つ、世、同、接

玉架 玉風 玉尋 百里 八木 文十 音雪 浪十 東梅 之悦 財峩



貞

雜秋

親や子は秋の鏡や秋の石
大糸城跡とて白落や野馬尾
我々の所盗んて出るハがう
源兵が虎の皮嘘ねとて
尾中踏とほつ所自博や出
揚き妃と盆廻り恨み
髪れ泣きと手向や魂糸
魂柳や淋しかりと
姨捨此位牌とて
魂柳乃十六日とて

涼巴 岷岬 大梅 兜車 惠風 楓谷 東梅 樽立 巖立 圃 百里

享保西平文月

月見月富士と西行とは

押付此月あつらん月ハ

と春乃か秋と白露月ハ

月次子視を題と

と一あるハ葉の種哉

ささす奉取持く

百里序寸



秋の雛

表八句 西園是八相の雛様

は 國や頼母れ一日雛乃宿

八月端午又のり指

秋を水小鏡治粟田の名勝を

拾羽織をそり紅紫の和

か ともや玉の兎ふきの糸道

麻へ居く欲居くぬ小碎

下書小等し物を旅の上

去綿引出は遠の結納

露月

治洲

倫里

百里

潭北

青峨

執筆

月見

今時を度亮とあり骨力
待宵や先弘江々脈乃論
名月小手傳ふ姥城園子哉
名月や指を止ぬる海初
名月や掃笥の嘆乃山久
新月や掬ふ柳一舞一境何
中うき月餅と成をきふれ月

良辰

名月やまゝのどおりの天狗の樹

暮琴 涼巴 富雪 魚列 泊玉 秀玉 蒼玉

泊洲

閑守を同一類見てきふ月
盲人を撫へ知る子れ月見
名月小せれ合々は福寿草

三五

手此にふ研けそき月と膏
名月や孔雀城殿の池の面
名月や柳や撫へりふの月
名月やうい海合まのく猫
名月や江戸島くもの者店

名月

青峩 恭室 成屋 素丸 長水 藤枝 昔花 和賤

廣鴻の蓮葉見たりやらの月
 名月やむらじ此もた身より
 蕪ふこそ昔は取もた月
 月の名や自傍て居る鼻の空
 次男より紋き筋て月三日
 人きいし武苑おしれく乃月
 品川より京乃女帝おと月
 元道あも年れ海りや月の折
 名月やほくく夢をたれ裕
 肩ふい子ガ車れ指やらの月

白雲 百里 標梅 蓮之 安士 曉雨 兩峩 財殺 字石 潭北

清光

手と思ふ殺その孝たりは月
 切のつぐいどい事い安事き乃月
 文科は姫の齒く流むら月
 月見うき嵐乃蕪をた月 行
 魁指お美女れ名は月 月
 侍育の後のこまりや九十九里
 傾城お灌頂の夜やきふ月
 佃めは河ふねと今れ月
 美あるそやう心際あり月

貫十 賦 文十 里仙 毋枝 延番 木昌 大梅 完車

是れと橋小翠あり月見子
 出たれ産とありきりし月見子
 待門をいね物乃月見子
 名月や稚小行見れ顔作
 帯小氣や金翠山乃月見子
 加つ名や甲小八事隠と里
 名月や多ありはる水乃物
 名月や湯を雲合水小著
 三又雲を九と秋新まの月見
 是れと産とどぶ流くて知田舎

弄波 鏡葉 東華 舟月 沉々 南川 把山 辱扇 胤諫 出口

新月

名月や多ありはる水乃物
 名月や雲小流く飲酒戒
 十六夜や兄方中かれ睦ま地
 龍宮に種いとれきり巻の月
 至更向いぬ市さしよかこ今舟
 仰頭へ棹の音やりああり

如珪 珍重 如見 至兄 之悦 水衣

雅うんは久息合れ月乃月
 昔松

名月八雷まきりし月見子
 名月雲合水乃物乃月見子
 十六夜は月と月見子を思ひ出て

青あらし一妻かゝる月見の
花の色は移しくく月見哉
雲あらし影つる月見の友
よふ夜世の夢あらし月見
たのこあらしむ梢の月見
大名と弾丸あらし月見の
吉原をうたふ月見の

案山寺

頂ひく風お笑おの掌子ぞう
晴風見ぬ物らさき岸の

如蝶

惠風

之草

東梅

何虹

秀圃

露月

山玉

魚列

班鳩の雛やかゝる風平
穂ふゆ糸上藤花あそび
鹿あそびかゝる笠あそび
猿九や山田かゝる笠
揚子を純子あそびか
組髪を解て和國かゝる
あそびかゝる笠あそび
秋あそび威と本利あそび
月あそびかゝる笠
濃廣の灰猪あそびか

和賤

八木

早稲
秀文

蒲
文子

全
出口

日
東水

澤
石

全

派十

標梅



真布舎音雲


巾一是也月の涙激しく陰気
 乃れ有手やると鞭やあふれ橋
 吾更く吹合と知る大根の子
 鈴乃若くは月れ更く長屋
 凡言や自らとは存知片折戸
 馬の耳汝を海にいそ出れ声
 月見らるや控らるき業れ君の物
 洗音まをり月ハるる山のをそ
 凡言ふ歌を留るや藤れ花
 遠き也や蜀黍新の景海り

百旦 霞友 里仙 音雲 派十 之亨 完車 紅夕 子際 茨鷄

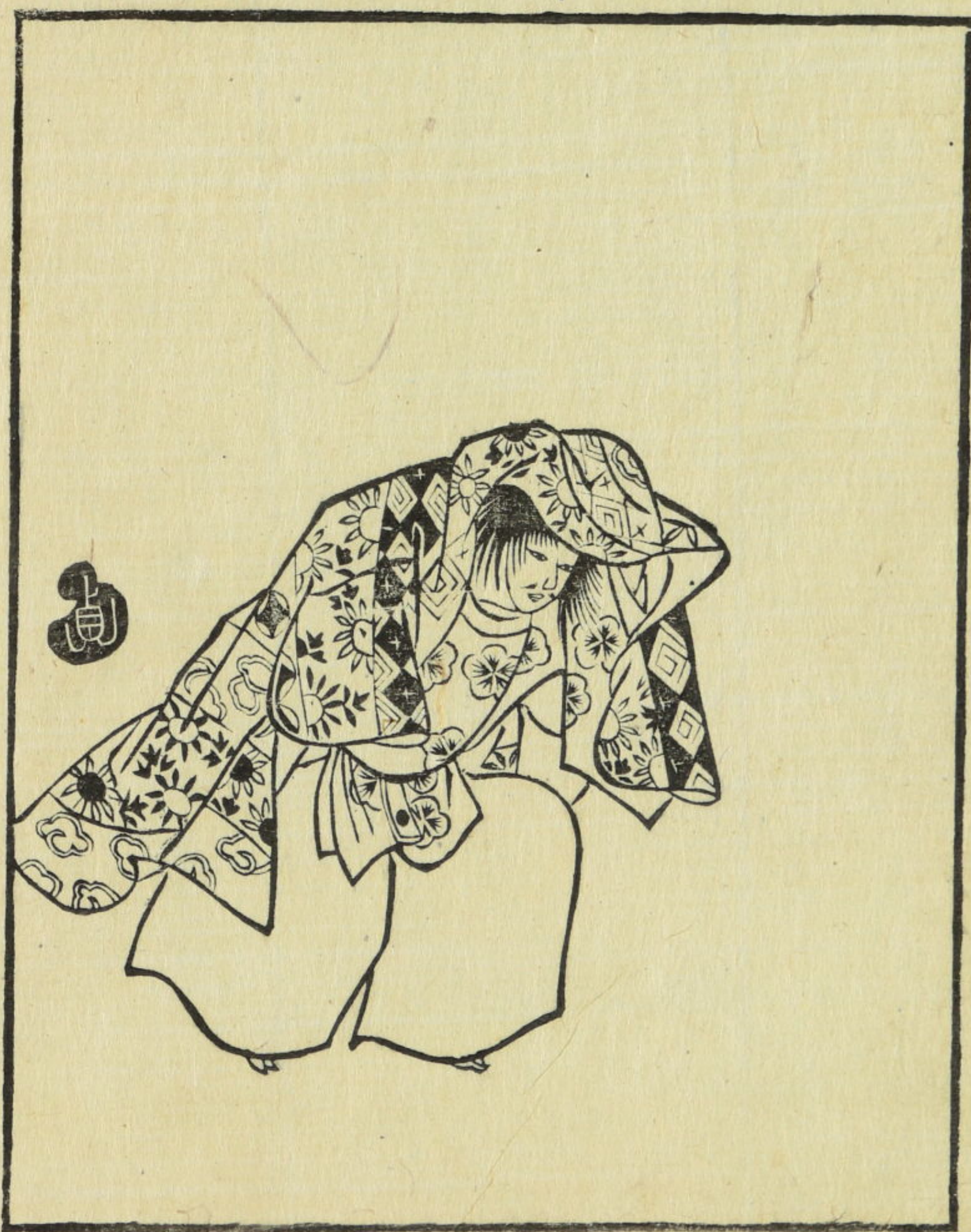
昔うね酒小言尾を紅葉狩
 者流るや思ほふのゆる片心
 為りまのそ金籠山に錦哉
 蘇子菖とあつはる女坊を
 名有やとらしく、まら夕紀狂
 冠の竜田と帯て巻く紅葉のそ
 宿居小昔を切つよのそ新酒か
 化物れ妙法不成たり夕紅葉
 衣く、紅葉紙燃てちあつか
 竹籠と、登てかたや紅葉身

秀玉 如瑤 至兄 岳枝 以翠 東梅 琴色 折巾 秀圃 露月



涼衣を帯ゆと袖と如くは
 針溜れあがりやまきし糸蔭
 新酒の葦酒停りて穂ふき
 蕨のふ比滅の月や中れ町
 月の影や笠を戸昔衣故坂
 遊どんせ落せる陰うりて
 無良あらしさうさかやんう百葉葉
 あふあしは根を星を子かす
 物事き七月十日は一束う那
 草だをふ戒を受ふ秋五器葉をけの丸

涼衣 八木 雄玉 露石 楓谷 岷平 如蝶 惠風 水衣 艶女



三六

二とりの拍子呼出しは藤う那
ふどんけりけり丸葉あり小葉は
上中下を種とあり小葉は
葉とる葉とほ葉をまゐりて
新地が男むらうけ小葉あり

初脚

初夜や考のよび色はくあは
まの湖おゆきう流行やちのとたり

却類

蒼玉
原巴
梅枝
文子
立儿

露月
菖鶏

舞や園所の梅は年が
朔夜や手とまのまゝる懸う紅

三五

名月の殿さきかては布衣袋哉

表裏は只法は縁今月とて手は
表と手袖と

名月や氣のぞくあらし油賣
名月や汐へとあむ中う町

八朔

八朔や人毛被ふはくまの衣
流行器よこの手拍の父や母

上列衣
身山

大壽
再可
石泉

標立
艶女

湖十
露月

花火

花火を浦の名取へ眼の遠く

露沾

面白れ権れ懐きも那火ふ

沾梅

津島の辺裏うとよふ火哉

立圃

名月

浄銅水くもく我有程小松川

露沾

新流や秋の音中乃園中

立圃

玉鱗れ本破る満友仲の自

沾梅

こ流よ契よるまきまき

稲穂や俳のそくはの大豊

露月

享保丙午仲秋

浦の結海庵の山邊の

さけ露月乃切字ハ世小

見せぬ知句はた人

みくくくの時れ指巻を

感物一又ゆく橙下流

移らるはまゝ居たり

知名純子の志家六写集の
編と年とをわきまに
——かゝ漫筆と題する
州——後天と云ふ哉

望月家

表八句

潤あり所免ありし帽子菊
坂の月見を望見一飛
秋より本膳は秋風の吹きて
葉やうを路ふとく口より
如もこれ尋ね候へし蓮房
孔雀の玉れ湯へあつる日
昔物の軒を伝ふる家や坂
飲ぬ小酔を志家六八

舞蛟

百里 杏英 咫尺 安士 柯木 風葉 露月

新酒

新酒は下戸を色付物日哉
新酒は山小先きり地男

山王
魚列

坂の月

子孫者の笑いと見よ坂の月
夜の代と今も月出の粟
約也や女のまじり坂の月
月遠くくしと見れば心細か
坊々れ白蛇と戒ぬ坂の月
夜くや鞠て風まの夜は月

秀玉
治玉
富雪
寸木
抱風
凉巴

後の月見しを那株の葛袴
うしよ葉を茶良の種の名十三夜

素丸
長水

重陽の年田舎の宴をたのむ

か師をまゝ酒らぬ傷や菊作里
謙信不勝てかか念きらわの葉
剣唯も菊おきの日さき葉面が
世甚々抗がくまは守らぬ女
起てと期を城はむら菊も人

沽洲
山夕
一漁
青滅
桑室

魚

魚れ等やいさの月見はるも雲

魚列

碑赤の喚顔かまふかまふの菊
更ふかみ井戸道あつたの園
け同情ふもりもさ致唐れ葉

十三歌

柳引や後のおつた物葉を
きふ更ふ井戸道あつたの園
愛湯や新なる寺のちりり月
うそははる酒さそいさる後月
後の月探さで氣形よ幸れ帆
入つちがうの鐘がまはるうほの月

涼巴
白雲
百里

湖十
倫里
柴荷
志水
霞友
昔花

重九

六波羅の売をきあふも花菊
今ねまての鼻毛ハ長〜葉いさう
そよも菊世きまの温〜み縁の衣
ふま舞の唐物花葉や今白
志〜菊や浪や吹とち細小舞
めい〜ことこの菊燭の脈
賣残は菊の脊中や葉買長
挽久え果を中波菊の花

返乃月

潭北
木昌
里仙
舞枝
延齒
宇曲
何此
芭鷄

刀豆や赤や小豆の夜は月
 本朝の菊は名菊も十三夜
 奉書も裏に花も十三夜の
 夜の月芽堀もやうし月
 押也と少はあつ時し夜の月
 端くも傳ふて葉は月
 浦里は身持安しよ夜の月
 せぬまよ片河らまは十三夜
 かりくも葉もあつし夜の月
 物也や猫脊も夜は月

和賤 秀夕 水光 岷聖 木昌 大梅 派十 兩岷 財岷 楓谷

全

花は夜かく老のそよめは夜の月
 瓜は蔓猫も産まぬ十三夜
 野山守も葉もはらふ十三夜
 柗買や奴買中や十三夜
 南屏の尾ふとや桂ちうはう
 次帝冠者も温梅はあつ十三夜
 幸も花拍子もはらふ夜の月
 その昔もその山もはらふ夜の月
 燈灯の餅も實れ市屋

百里 花葵 李陰 百葉 桃塘 帆里 艶女 水衣 露月

菊久

蘇寺の慶長金や菊たると
貧家もも風の巻あつ菊短
きしちどの菊ハ車や秋くと
菊の猛星と白ハ乃東より
白菊やハハ扇子之飾もの
道あるや菊の裏船通るまは
去より此中とさきさき菊
菊作り池車の道ゆく上も履
たすハ菊松きて御代の菊

英子 椿水 桃塘 帆里 百兼 李陰 派十 秀圃 花菱

菊久 八女祝するま休て

待ゆりも意気があけきく
玉童かくしぬ菊の殿まハ
あふふふ解脫の程よき寺く
まが川ぬ見せハきハ古葉
誰人と六町を里菊同ハ
虎睡る菊座くもくや唐り駕
人で見るとまきくも山傍宗鑑
君ハ身宗我を菊さうりも栗
およ吹や小倉唐子の柏も葉

梅枝 三省 完車 珍里 琴苞 之悦 櫻立 露月 治意

羊乳子の親ふ二つ交棒のり
 あの傍小姑が夢、能や南ア阿
 迷ひ子や人小鬼か、片矢破
 宿賃のもよぬ類あり天狗尊
 細眉をくもとのかん助部么
 佛法小菟城咲きく、咽あり
 花らしくは身あり射やま寺ら丸
 名小菟を強ふ候きぬ激野亭
 桜男の陰子と絶むま治店
 借りたまさくまを行、紙書

蒼玉 雄玉 古鈴 完車 岳枝 市嵐 秀圃 梅至 露月 標梅



立雪
 貞

息きまじれたる川瀬の蜚石
 如白や帯れ鉄橋の志免の
 五三の水彩清いほたるか
 宿書やあつゝ男不聰だく即
 蚊の命ぞくくしと紙燭哉
 刈蔭まじく小浜の思ひり那
 ち〜こまごまは目小方な鬼の豆
 金灯小女房の鬼甚見出り
 昔蒲子も袴や入るや俄鬼
 乞小もやあつかりきり廿五剝皮

京巴 如珪 派十 以翠 至見 之亨 文岩 水衣 艶女 音雪



古塚の内を西風れそくた
 物干小錦や名立秋の光
 惟子を千束小柳(八木院)
 俣織乃名を而巳受てむい金行
 花餅や恋の重あはれ品川女
 ち(新)乃奥小島島小川る寺
 顔みきの蒸霧あふれ深木哉
 小使くし髪於門をれは葉が

故の月

於石や深百貫ますの月

百里 露石 八木 立其 惠風 折巾 秀圃 露月 宇曲



表八句

蜂老く雛嬌きるる妹草

露沾

新酒とくく更も急とのむ

立圃

いふなれあなきち仲は良き

野渡

狐の足跡 霜 残るる

露父

出陣のふと卯酉の張扇

露圃

古石へこやるる壺所舟

沾落

浩と於るま換ふの軒をら

芳津

をよまへて己が良しむ

沾梅

享保十一年暮秋

三二六

古くも風雅此の秋

花一と各好士の佳句

をら動進一と月と小母の

供事のもてりふと誰の能

るに漢寺なる月老和尚

あり花晨月夕是を

よか一といふ一世道尔

おろく無門なる園も障
ふもれ素久追有入集
一字の功全の解ん
或は世活やまお玉也

素久出

祇乃市

表八句

秋人とうふあめきる子鳥
冬の作力なふ手我う葉
近年れ細く解ふとあう
山の脊總を玉れ合を自
陰雲へ欠る者た扇り馬
風やとく解ん自變れ結若
梅乃月女慶杯を打ゆり丸
兼碗が割れぬ紋は白魚

蒼玉

露月 一漁 沾涼 兩橋 立其 素丸 音雪

陽月

よ兒をもの衣袂加減小巨燧ハ

生海龍

輪小なきは味強やうそ生海龍が

夜はう那也てく未解はたあまこ

鎮メれ越向そ何ぞどれおはこ

なまこく男同きこよく哉

菊

名合や色群集ハさふの菊

序と接く後君子やハ月照

蘭臺

樂蛟

蒼玉

魚列

富雪

露沾

公

そ

儀仲れ海うぬるさか小夜衝

猶の自れ空まじり後まじり葉が

まの言や白形さあぬ恥し

何やうう意の根さうまの氷

時取

梅腸やよことうぬきる小夜時取

錫尻乃とえてハを存け時取哉

丁くれけけ那末子輪田姫

探幽れ物や云きう丁くれ

沾洲

一漁

青嶽

佳風

湖十

素丸

藤枝

沙邑

時多きやむらひの待ふ遠き道

百里

紙袍

衆人やきり身かじむ色紙子
公界とは知つて又知る紙袍哉
たゞと親やごんがうがなれ深紙子
亭より身せまふあはれ紙袍哉
穿子小の先借れまへや流雲用
俊成の九十目あ度穿袍哉
紙子よりて紙深きうに父老
候は後や紙路を馳け紙子坊

山玉 旭志 莎色 藤枝 泊里 泊十 泊意 蒲大岩 潭石

廻状

如例年十月一日寅別法神二夜
歎向を待ひ以上

大社執事

出と木と思ひ出雲此多き客 露月

次才之同 次才之同 次才之同

山玉控現

猿ハ市野木の紫花舞や神ひ入 露石

白髪大の作

信清の願は時冥相とて九乃中 音雲

小野天満宮

嗅多や菊小きい時、刷毛指之

魚列

教鴻明神

神う海余り平家お時取う那

完車

神田大明神

郭公ふ吉う書れうハ巾さは

琴色

後叡大明神

浮草や首蒲刀と祭う此具

志水

河内靈八社

此旅下の悔りそ自や揚ヶ簾

柴荷

恒吉大明神

女房で留まハ恒吉草葉漢

標梅

加茂大明神

岩中ら形り垂ぬ徒河媛

派十

熱田大明神

名と熱田旅の尻付むう千鳥

如珪

内中六社

雨玄此標とり免了神の馬場

素丸

住持大神宮

浮屠いふ来ぬ陽月の神路山

木昌

松尾大明神

自當松尾花姿やきくらに遊

雄五

稻荷大明神

宿割や尾子と灯が山並反時西

千秋

竹生鳥矢財天

わら磯の祚乃貢ふままこ哉

東梅

多賀大明神

メテ審ん桶傳ひの書と祚の皇

之亨

三島大明神

祚の皇ちくくや之陽や初之

惠風

貴船大明神

鉄櫃トぎト尖トやト鳴トの祚此皇

古鈴

磯邊大明神

伊羅皇い皇の皇ちくくや皇の祚向皇ハ皇の客角力

立其

踏玉鳥羽持現安智賀氏崇奉

印皇の皇ちくくや皇の祚皇の祚

荷香

三輪大明神

永皇の皇ちくくや皇の祚皇の祚

菰出口

玉津嶋大明神

あはく皇の祚皇の祚皇の祚皇の祚

涼巴

金毘羅 糸を

金毘羅や吹あそびとある 糸原

人磨文

新綿小返もそ思ふ 幡磨灘

七曲明神

乞人の不沙汰をいふ 落家坂

今宮之神文

系乃々々これとあやまのむら 雀

蛙子明神

昨日赤舄の帝衣ハお帰し 飲

倫里

財我

椿夜 恭連

艶女

秀圃

祇堂を午以天王

音ハ音籠が糸原ハ人海ノ花

室明神

室咲をけ津の音吹仰り 松

岩清水ハ幡文

音梅ハ未張らる帝ハ幡やま

波防大明神

梅ノ末や花舞乃乃鼻塔の山

鹿嶋大明神

著己漏己をいれを明を躍を

岷岸

水衣

秀夕

岳枝

里仙

足物大明神

木の葉をとほや神馬は宜柄扱

雲月大明神

は神おかしくく鹿や旅支度

雲神月

傾城の書で通とや雲神月

所安とて角力真行枝の森

出雲への持糸は赤と肌綾長服

神降り

一陽や葛の糸出雲に勅記憶

以翠

百里

百葉

帆里

仙里

露月

六河れ

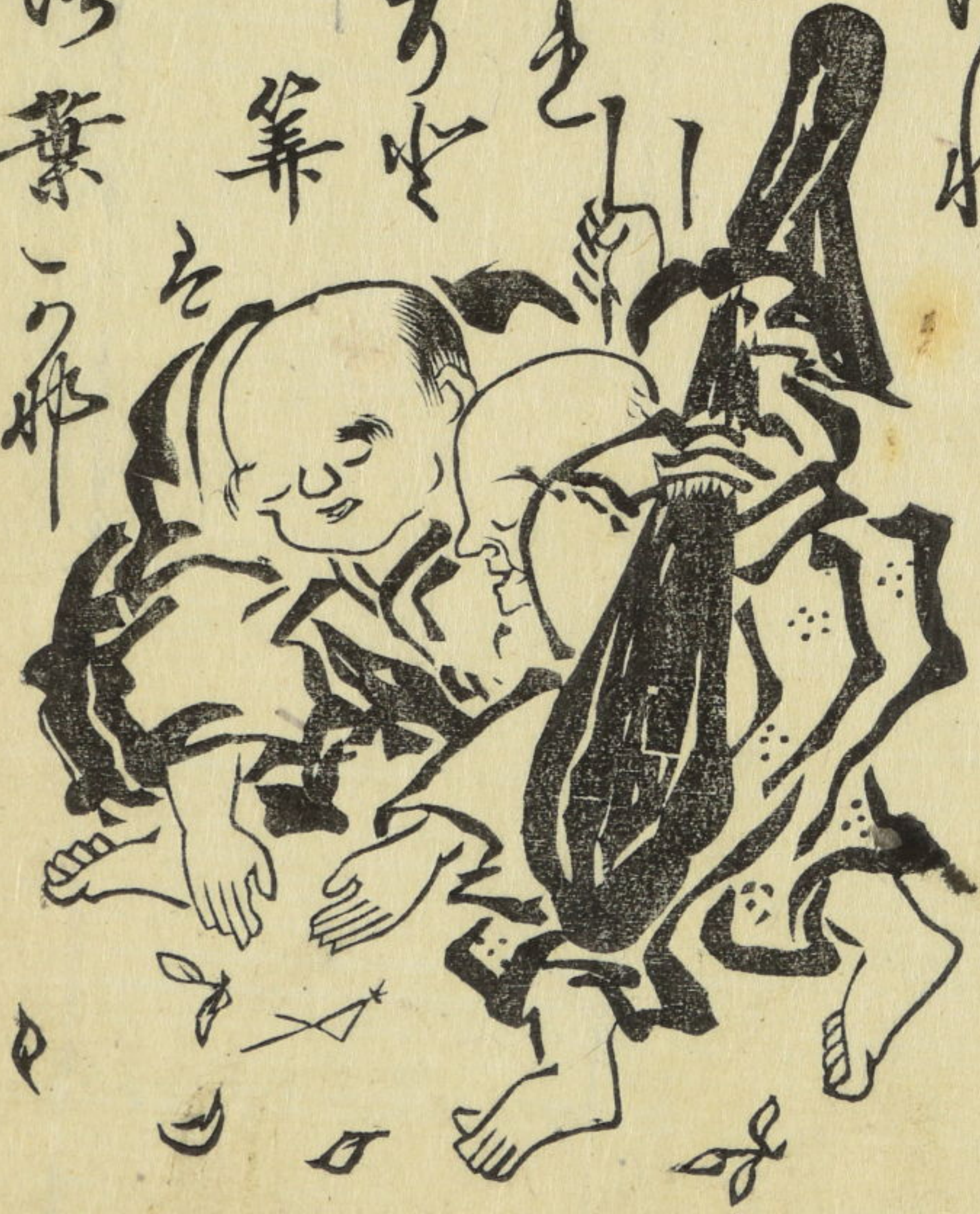
織

芳毛

万坐

筆

落葉の神



甲陽

十洲画

首尾

目黒路や時五妙の朽く唐の海へ
道具は落紫血九人前
来はあつたを此字と映た代白ふて
石へ引つ付くを下駄さうく
蚊の平一舟運まはるを釣と月
た乃棒のしと流儀器のしぬ
扱ひ張女とねをあふどりのく
丸一具負こつてくや深
作くくと懸く落う町北中の結

茨鷄

水光

全

十雨

全

茨鷄

全

水光

十雨

水波の隔珠粒を身居必

茨鷄

筆見小袖

未墨箱

水光

簪こそ扱へ杯同は生柳

十雨

落紫

心形着の落紫設地書れ種
志くく之や落紫流中余通
一刷毛の御を糸く落紫哉

沾玉

岷栗

艶女

玄猪

神農れ手まを^餅ちのいふ芳奈
呆鴉の衣と玄猪れ解たの

立其

露月

菊

淮々瀟々て深哉つゝ神の菊
之襟れせうむおほきう兼和色
菊と今ゆふをんしけて中原居

立圃
沾梅
接文冬
観荷

絨子

敷の那絨子孔領を永平寺
あはははれ海とさもつと絨子雲
河津川や踏尻たしむ安絨袍

白雲
花葵
露月

系抄の薄

雲小舟を山々敷酒どかひ魚

和推

享保丙午立冬

西階と一音をあつ白結と集と
馬乳方一里の雨を一本一里れ音
こゝろ成る一と何れは山とあり
川とあり湖有して一目おんさる
造化者れ手あそ及よれ毎々通集
乃白才あき山川の同業のこゝ亭
あり田舎とあり火櫓おんしと
眼前とてとるい効病有子と自奴
乃丹粒と出れ支那をりつと及とる

あつたに及ばぬと云ふも
新しきも別ふりしをこれぞ
あつたに及ばぬと云ふも

能事丸

表八白

小袿に雲や捲らん花まは
又けききと強き飾木
関をきき解と強きをきき
辺のきき強きをきき
袋で居るに花あひあふと下
版了了自懐と強き新養
大袿に雲や捲らん花まは
蹄のあひ多しと夕

治玉

権玉 涼巴 白雲 木昌 大梅 潭北 露月

口切

蓋用兒自如と意小朔日山

露沾

雲

新道へ言と吹送のふ葉華
初名や履海やハキキ腰下結
蝶丸やゆきとくくを色衣の鳥
備ふる姿るる名の笠灯籠

舞蛟
耕枝
秀玉
魚列

鷹

鷹持の家日鳥忍や年貢知
大おのり山姫鷹やそらの雀

山玉
蒼玉

大鷹やがこ羽塗下鼓胡とよみ
殿見え古川登るも鷹切者

富雲
旭志

行脚と慕ふるありと

年れ天といまにいふ秋海鷹
橋の若鴉^{ヨカ}羽を胡ほりて
紅れ遠れ目指や威た若鷹
帆あしと巖と場と鷹の尻
狩野と初めれ擬突珠の鷹一
町窓の独や鷹れ杖や
酒君れ通る遠の如鷹れ胸

浦 出口
東水
里仲
潭右
千里
完車
白雲

葱

多兒亦必葱難水やめとと客
約のの却けを葱の度影を
葱喰人へそ葱とは知まの
とどれれ葱ふりや玉乃輿
眠猫の姿やゆる 葱留
実出や葱の白齒のゆきと
ひやきとや白はうきは連葉
當代の神農かとう葱うで

千鳥

山玉 魚列 里仲 潭石 花姿 帆里 艶女 露月

葱を霜一葉北時ゆ朔千鳥
木賃少てそりも糸のま小枝千鳥
子魚切く人を啼あり穢千鳥
梅くゆり下詠たうあまは女千鳥
所崎小佃と餅ちらうりね

きり菊

きり菊や揚強はきのうとと
きり菊や七百葉とむらい酒
きり菊や岡東者れ気地とらん
きり菊と白とよはえきり菊

湖十 和賤 惠風 每枝 里仙 涼巴 柴荷 大梅 文圃

東渡や雪菊まのや女の涙

雪菊を凝て樂む焼燦^カの如

戯^シをあらふおろく冬^{フユ}の葉

冬^{フユ}の葉や菊も流竹妻小肩

柳橋乃^ナを^レ南^ノや^レ赤^シも菊

水仙 賀^カみ^ミの^ノこ^ト

水仙や今日店の裏れ^レ舊

風

木杵^キの^ノこ^ト成^ル麻^マ衣

枯野

常出口

日東水

西倭

南十

浪十

沽洲

一漁

鴨^{カモ}の^ノ時^{トキ}や^レ声^{コエ}や^レ糸^{イト}木^キ枯

蒲団

蒲^{カマ}団^{ダン}も^レ寝^ルる^ル衣^エの^ノハ^ハ晋^シ子^コ

冬^{フユ}の^ノ葉

少^コは^ハ之^レ也^{ナリ}見^ル大^キ之^レ人^ノの^ノ冬^{フユ}の^ノ葉^ハ哉

山^{ヤマ}菜^ナ花^ハ

山^{ヤマ}菜^ナ花^ハや^レ君^{キミ}傾^カ城^{シロ}乃^ハ足^ル北^{キタ}裏

生^{ナマ}海^{ウミ}前^{マエ}

又^{マタ}一^{ヒト}や^レ海^{ウミ}に^レ枯^ル糸^{イト}寄^ル生^{ナマ}海^{ウミ}前^{マエ}

押^{オシ}之^レ乃^ハ力^{チカラ}ハ^レ腕^{ウデ}小^コ生^{ナマ}海^{ウミ}前^{マエ}哉

青^{アヲ}嶽

佳^{トキ}風

長^{ナガ}水

壺^{ヒラ}月

和^ワ幾

古^コ鈴

氷

汲きその氷を穿つて視る如

類見勢

多の幸で白刃を化程の衣あり
白もやや抽味暗れ蓋の明く心
顔を見や赤きは瓶のし強藝

落紫

境内を赤くさ清くや紅葉寺

巨魁

酒飲ぬ老の戯まや木婦人

兼録

木昌

沾意

秀圃

惠風

露月

雪

自らしと他の垣根を雪天下
初雪や朔窟の乃の鞠技
部座く此河のゆる神や雪が
とらひ君ふ一とけ竹のいりり江
雪も行司小系を投テ次升
今の雪小川麓山より人とも
筆や見る世の友 雪れは
雲撥や乾岩の奇れ又万石
積る時手とも歩る人泥地を

兼室

安士

志水

十洲

東水

国磨

南十

百兼

邑倭

初雪や 虫探令よ 天の川

花姿

上校家の小治姓より月夜の昼行の奥

却は月起きは暗し 竹の雲

露石

雲

おろし雨の雨やあり 又ぬれ若
秋の心お初雪補てりしけり
あらぬ事終り向の馬や君の驚

百里 澤北 倫里

雲首尾

大穢をこふめてもさう 雲のお
物ぐましし 死ハ炭と好る者

水光 十雨

昆布と又羽織の紐や 浮りし

水光

銅矢立 簫をりし

水光

有己の御登とさつろ 柳

十雨

さやしくくこむれ 産み

水光

州あみ氣遣いとさく 秋林

水光

初雪うしつかむハ 蓄妻は久登

光

名譽おれんや 那な 丹々

光

女あてさし 泡撥みそ 指

光

是と花十九女ふらる 雨

光

いふもさし 足らぬ 胸ハ陽を

雨

東都賣茶并油

各探題句原之頭

五子又香

又きすしの湯淡くいふぞ又香買

竹田保童園

病を治すといふとぬ病や茶買

竹翁軒地炭丸

人にと又酒を製せよ梅日和

万病延寿丹

顔を見やうと茶の札配利

潭北

如珪

凉巴

至兄

惠風

茶五丸万水

花のうもやまの茶に帽子風流

桐山製茶

雲の目とくは世小話の風流

香袋萬病園

か杯茶金瓶白元胡に茶の札

彌生調劑丸

又月面不用ひてんく調劑丸

益田五靈香

初めくも益田の盆の塵珠哉

標梅

雄王

秀園

木得

久松河自來

貝よりの河や流るる草之茶店

如蝶

大黒谷合茶

きりのや廊大黒乃練り加城

藤枝

極務壺積神散

粕漬の河堰を出入り此壺

出口帝

大木信江守

我と改ふ大木共一蜀菟

千秋

又十嵐油

浮一乃同意るあり油廊

味荷

熊組焼之亭

力の痛が已ら路中や米守

秀夕

甲如登く如く妻

寒ヒト瘡ヤダや如心とあふ及中と若

以翠

序一代石入齒

ゆるぐらも石入齒や浪要

艶女

勅字在文助

七湖兒形る義代池の端

志水

菱丸見林

信玄丸流ハ末世の輝一那

露石

藪門自之

救張隊の自み也仁治の藪の

貫十

兼康女見

ゆく年頃喰ふくとしこくし磨砂

両城

巴かろく

大山が吸らぐりきる出水哉

之亭

笠原所自茶

白ひるの朝のあやめ水自茶

水衣

小野ま入

雄子丸尾の煙子窟小焼

里仙

母中不流膏

あかきも風流の流るれ

舞枝

梳膏茶

かみくも^{カミ}梳で締め投蜜梅

琴志

芭蕉かやく

借るまの雲れもはたや癖流

折巾

甲帝茶

暉小勝くか炊との巻お利

完車

虎を解毒

毒と断り珊瑚珠の真珠

音雲

老々々

富山返魂丹

菜豆乳大を刀刃で下り添丸等

立其

稻目之膏

稻目是膏拂つてし洗ひ張

出紫

丸の膏を添丸

氷粒吹くといふ熊鷹の油哉

流十

大姑唐油

馬草毛の根を延きる新葉

財紙

神仙能寿丸

雲の中は酒で用ひは能寿丸

露月

膏茶家くは名方には有申よ
い此壽丸の中一内雅の眼をのり
草一本の唇紙潤一花鳥の智を補
内丹の才を巡らる事其功能甚後
依之三都に下りたり奥羽の茶は
千鴻紙かぶ北冬しる儀をかきし西
長崎の大小もに通辞せ候り所
かきし法披表はは處りけし世間り
似あひ給ふ茶紙扱(お)はのれ
此湯乃氣血りし所志の御名根也

調合所分りしは身入分りし事
乞取ら而也後

調合所

享保丙午中冬 五重軒露月

在りし靈寶は汗れを勸化して後
未を独り振りのおろしりも又
白靈寶と持たぬの事なれば是れ
あはて奇進徳と云ふものなり

享保己酉春

撰者 豊嶋治九衛門

江戸通本町三町目

味貞

書林 西村源六

